

⑩ 「脈うつ瓊林群像」―長崎新聞社編集局著―を読む

本書は長崎大学経済学部一〇〇周年を機に、OB百余名の個人事歴を称揚する本である。それは長崎新聞社が03年4月から05年6月まで25ヶ月をかけた連載記事であり、連載後これを一冊の本に纏めたものである。一万四千六百名から選ばれた一〇四名はまことに百花繚乱、多士済々であるがこれを六区分に分けて紹介する。その内訳は①県外経済人44名・②九州経済人13名・③平和運動の担い手3名・④教育・文化人12名・⑤行政・政治家7名・⑥県内経済人25名となっている。各個人を夫々B5判の見開き2頁に割付け、ご本人を紹介する「キヤッチコピー」のもと、顔写真・卒業回数・現職務・現住所を掲げる。傍らには「所属組織・企業のメモ」なども添えて懇切丁寧な紙面になっている。

記事の中身は、長崎高商・経済学部在学中の想い出に始まり、半世紀の歳月を隔てて、己が人生を全うし、今は光輝ある地位を獲得された経緯が、人柄と挿話を挟んで巧みに紹介される。文中に(小見出し)を入れた新聞記事は一般にも読み易い文章になっており、謂わば「長大経済学部版・私の履歴書」と言える。もう一つ。各頁の左下隅に「スポット瓊林会」と名付けられた囲み記事欄がある。此処では三六〇字程度で仕事とは別に肩の力を抜いた各仁の趣味嗜好、人間関係を絡めた「瓊林会」への想いが綴られ愉しめる読物になっている。

さて古語に「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」との至言があるが、本書から十年が経過した今日、本書掲載の多くの方々が、既に幽冥界を異にされている。そこで私は、長崎新聞編集の本書を、卓越した俊秀より一旦離れて、「長崎高商から一世紀、伝統と歴史を刻み、多彩な経済人の輩出した」母校の歴史として読み直したい誘惑に駆られる。

そうした視点で本書を捲れば、著者には本書を歴史的な書物として後世に托す感覚は、些か希薄なのではあるまいか。つまり「脈うつ瓊林群像」を、日本経済史の一世紀―戦中の拡張崩壊、戦後復興から高度成長期を経て、デフレと格差の金融資本主義―の流れに置く、と、「アンサンブルヒーロー」を含めた母校の総体はどのように映るのであるか。其処を見つめ直してみたい。そうでないと本書は、歳月と共に忘れられる偉人の「献呈本」になる。

何とか本書を「歳歳年年人不同」から救い出し、母校一〇〇周年時の息吹と優駿な先達の余影を後世に遺す手立てはないものか。其処はもう著者の知恵に待っしかなないのだが、10年を過ぎた今、私ならどうするか。私なら取り急ぎ、本書の「スポット瓊林会」欄のみを、歳月順に再編集してみたい。もしかすると其処には、著者の称賛には値しない母校同窓会庶民の平俗な生活残渣が匂うのではあるまいか。これこそが明治・大正・昭和から平成に至る高等商業技術教育を担った「長崎高商物語」などではあるまいか。私の「ないものねだり」ではあるが、私が生きた時期の母校百年の息吹を自らも確かめたいのである。(04/17)

☆本書の周辺☆ 創立百年祝典の経済人は、今

いずこ。現在の瓊林会館には、本書が未だ50

冊ほど眠る。皆さん読んで欲しい。それにしても、我々は何故「百年史」を書かなかったのであろうか。

